

原 著

## 早期胃癌の治療法と成績

大 島 貴<sup>1)</sup>, 國 崎 主 税<sup>1)</sup>, 粉 川 敦 史<sup>2)</sup>, 深 堀 道 子<sup>1)</sup>,  
佐 藤 勉<sup>1)</sup>, 牧 野 洋 知<sup>1)</sup>, 永 野 靖 彦<sup>1)</sup>, 藤 井 正 一<sup>1)</sup>,  
田 中 克 明<sup>2)</sup>, 今 田 敏 夫<sup>3)</sup>, 大 舘 敬 一<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup> 横浜市立大学附属市民総合医療センター 消化器病センター外科,

<sup>2)</sup> 同センター内科, <sup>3)</sup> 附属病院, <sup>4)</sup> 医学部看護学科

**要 旨:** 早期胃癌に対する治療法は, 胃切除と D2 リンパ節郭清を基本とした外科手術治療が主に施行されてきた. その治療成績は良好で, 90%以上の5年生存率となっている.

しかし, 良好な治療成績を得たものの詳細なリンパ節転移の検索から, リンパ節転移率は低率で, 無駄なリンパ節郭清を施行している症例があることや外科手術後の後遺症の頻度が必ずしも少なくないことから, 術後の QOL が高く侵襲の少ない治療法の開発が望まれていた.

最近, 内視鏡治療は, 従来の粘膜切除法 (Endoscopic mucosal resection: EMR) から内視鏡的粘膜下層剥離術 (Endoscopic submucosal dissection: ESD) へと技術開発が進み, 本治療法の対象となる病変が増加した. 一方, 外科手術も, リンパ節郭清範囲を縮小した機能温存手術 (縮小手術) や腹腔鏡補助手術の導入により, 低侵襲の手術が行われるようになった.

本論文では, 消化器センターにおいて経験した早期胃癌の内視鏡治療と縮小手術・低侵襲手術症例の治療成績を解析し, 良好な成績を得たので報告するとともに, 今後の早期胃癌治療の方向性を示した.

**Key words:** 早期胃癌 (Early gastric cancer), 内視鏡治療 (Endoscopic therapy), 内視鏡的粘膜下層剥離術 (Endoscopic submucosal dissection), リンパ節転移 (Lymph node metastasis), 機能温存手術 (Function-preserving operation)